

ABIC 国際社会貢献センター

Information Letter

No. 44 2015年11月

外国企業支援	「化粧品産業技術展CITE JAPAN 2015」に参加して ……	2
自治体・中小企業支援	カンボジア・ポイペト事情 ……	3
プロジェクトの受託	虹の架け橋教室の終了に当たり ……	4
教 育	大原学園での貿易実務講師活動 ……	5
	日本貿易会／ABIC／関西学院大学／青山学院大学共催プロジェクト ……	6
	「経営学特講—英語によるプレゼンテーション入門」を終えて ……	8
留学生支援	「日本語パートナーズ」タイ第1期として、現地高校で半年を過ごして ……	9
	日本語パートナーズ事業参加者との懇談会 ……	9
	東京国際交流館での活動 ……	10
	兵庫国際交流会館での活動 ……	11
事務局だより	ABIC会員懇親会を開催 ……	7
	会員の種類 ……	12
	法人・個人正会員／賛助会員一覧、活動会員数 ……	12
	賛助会員入会のお願い ……	12

特定非営利活動法人 国際社会貢献センター (ABIC)
Action for a Better International Community

<http://www.abic.or.jp>

〒105-6123 東京都港区浜松町2-4-1
世界貿易センタービル23階
Tel : 03-3435-5973 Fax : 03-3435-5970
e-mail : mail@abic.or.jp

【関西デスク】
〒541-0053 大阪市中央区本町4-4-24 住友生命本町第2ビル9階
Tel & Fax : 06-6226-7955
e-mail : kansai-desk@abic.or.jp

外国企業支援

「化粧品産業技術展 CITE JAPAN 2015」に参加して

ほりえ ひろし
堀江 博 (元 住友商事)

今回小生が担当したのは、パシフィコ横浜で6月に開催された「化粧品産業技術展CITE JAPAN 2015」で、化粧品の原料や処方などの最新技術が一堂に会した国際展示会。

隔年開催で2015年は第7回となる。日本での展示会参加は初めてというインド企業からABICに直接連絡が入り、同展示会でのサポート要請を受けた。

ABICの活動は、その名の「国際社会貢献センター」が示す通り国際的な活動を軸としているが、依頼者が地方自治体、大学など日本国内の関係者である場合は依頼内容も伝わりやすく、時間的にも比較的ゆとりがあるが、外国企業支援は遠隔地からのメールでのやりとりが主となり、また急な依頼も多く、担当の西山コーディネーターは、その点、要請の中身を把握しての派遣者の選任などご苦労が多い。一方、ビジネスアドバイザーの役割は単に指定された語学の通訳だけではなく、当該企業の事業内容・製品を理解・把握した上で、日本あるいは近隣国での市場展開に対する確かなアドバイスをすることを求められており、その職責は大きい。

今回の依頼社はインド中部の企業で、インド特産の果実の種子から抽出した不飽和脂肪酸を含有する成分の化粧品原料を、日本および周辺国の化粧品分野に市場開拓しようというのが出展の目的。イタリアほか欧州には輸出実績があり市場を確立したが、最近中国ほかアジア諸国から日本への観光客の買い物の中で、スキンケア化粧品が土産物の大きな比重を占めることも聞き及んで、社長直々数人の担当者を随伴して訪日を予定しているという意気込みも伝わってきた。ところが会期も近づいた中、ビザの関係で訪日が困難との連絡があり善後策を打ち合わせていたとこ

ろ、今度は1人のみ参加するとの連絡。さらに参加の1人も東京着が遅れるので、前日に会場に行き、同社の出展スタンド指定場所を訪れ、設定がきちんといわれているか確認してほしいとの要請。急きょ小生が会場のパシフィコ横浜へ駆け付け主催者団体にあいさつ、所定の場所へ案内を受けチェック。会場は会期まで半日というのにまだ小間・スタンド設営の工事真っ最中。当該インド社の気になっていた「マリーンブルー」のカーペットが敷いてあるか、パンフレット用スタンドがあるか、そして「ごみ箱」があるかという3点を確認してまずは準備完了。そういえば両隣の出展社は追加費用のかかるカーペットはなく、フロアはコンクリートのまま。国際展示会場の運営者もきめ細かく費用をチャージする一方、出展社もなかなかしぶいところもある。

いささかドタバタ感もあったが、インドからのR&Dマネージャーも第一日目昼前には成田から会場へ。前日は工事現場のようだった会場もすっかり化粧をした小間・スタンドがお目見え。小生もプレゼン用資料を貼り出し、舞台装置も完了し来訪者に備える。初日は、入場者が増えてきた昼以降はR&Dマネージャーを軸に来訪者に応対。展示商品原料は、かつては規制があったが最近では緩和され、かかる特色のある原材料の市場開拓の余地も出てきた環境下で、単独参加の当該マネージャーも目的遂行に孤軍奮闘の3日間であった。ビザ問題は日本入国ではなく、その後の訪問予定国の在印領事館に手続きをしていたら思わず時間がわかり、旅券がホールドされて結局日本への出発に間に合わなくなったのが原因にて、ABICの状況理解の的確さと事態に応じた対応に感謝しつつ所定の成果を挙げて離日した。



化粧品産業技術展CITE JAPAN 2015



出展ブースにて (左が筆者)

カンボジア・ポイペト事情

やまだ ともしげ
山田 与重 (元 伊藤忠商事)

2014年10月にカンボジアにある経済特区で働くというABICからのメール案内に応募し、首尾よく採用された。そして、ここポイペトSANCO経済特区（カンボジアと日本の合弁会社）に駐在してあっという間に6ヶ月が経過した。ポイペトはタイとカンボジアの国境の町で、タイ側の町の名前はアランヤプラテート、バンコクまで約300kmの距離にある。ポイペトは（1）世界遺産アンコールワットへの通り道、（2）カジノのある町、で知られている。最近では経済特区が3カ所（2カ所はすでに開業済み、1カ所は間もなく造成開始）に増え、「経済特区の町ポイペト」が第3の特徴になりそうである。

SANCO経済特区は2013年から開発が始まり、現在2社が工場を建設中、1社は日本の日本発条、もう1社はタイの鉄骨構造メーカーである。将来的には20社ぐらいの入居を予定しており、20社が操業を始めるとおよそ1万6,000人の従業員が働くことになる。私の仕事は、SANCO経済特区の全体管理とテナントの誘致である。タイに隣接しているということ、また労働力が豊富で賃金レベルがタイに比べるとかなり低い（カンボジアの2015年度の法定最低賃金は\$128/月）ということで、いわゆるタイ+1を検討されている企業からの問い合わせが大変多くなっている。この地域にはまだまだ本格的な工場が少なく、大部分の若者は農業に従事するしかない。われわれの経済特区が発展してゆくといろいろな業種の企業が進出することになり、仕事の幅が広がると同時にたくさんの雇用を生み出すものと期待をしている。

さて、ポイペトでの生活面だが、カンボジアの田舎町ということでお世辞にも便利で快適とはいえない。ただ、唯一の救いは、上述したカジノ地区があるということである。タイとの国境に位置しているので、連日タイからのカジノ客が押し寄せてきており、老若男女それに小さな子供まで



SANCO経済特区正面にて

がカジノを楽しんでいる。ドレスコードなし、年齢制限なしで、タイからの日帰りあるいは数泊宿泊して楽しむ、いわゆるレジャーランドのイメージである。そのカジノ客のためにカジノ地区には各国のレストランがそろっており、味もタイの方々の味覚を満たすレベルで合格点だ。日本料理店もあり、刺身、すしもある。このカジノ地区に限れば衛生面も大丈夫、ビールに氷を入れて飲むのが一般的だが問題はない。また、肉・魚などの生ものは置いていないが、タイの国内にあるような小型のスーパーマーケットもある。

ポイペト市は周囲の自治体を含めても人口10万人程度の町で、市内に交通信号はなく、国道5号線（いわゆるメコン南部経済回廊）を中心に町が発展している。基本的に人も動物も自由で、犬も牛も子ヤギも野放しである。出勤の途中で牛の朝の散歩によく出くわすが、付き添い人もおらず、そのうちに自分で家まで帰っているようだ。ポイペトの主要な交通手段はバイクで、タクシーも基本はバイクタクシーである。バイクは3人〜5人乗りで、1人〜2人乗りはかなりぜいたくとなる。住めば都のことわざ通り、駐在前の心配も今は雲散霧消している。



カンボジア側から見たタイ国境。この間約300mがカジノ地区



牛の朝の散歩

プロジェクトの受託

虹の架け橋教室の終了に当たり

もり かずしげ
森 和重 (中南米担当コーディネーター、元 三井物産)

1. 「虹の架け橋教室」委託事業の経緯

2008年のリーマン・ショックによる世界的な経済不況の影響で、日系ブラジル人等定住外国人の子どもたちの就学環境が不安定になった。2009年初め、政府の緊急支援対策の1つとして、文部科学省により「定住外国人の子ども就学支援事業」(虹の架け橋事業)が決定された。「国際移住機関 (IOM)」が委託を受け、日本語教育を主とする「虹の架け橋教室」委託事業として2009年9月に第1回の公募が行われ、ABICは受託することができた。茨城県つくば市と常総市のブラジル人学校の教室を借りて2教室を開講し、引き続き2011年まで3年間受託し計3年活動を行った。しかし、就学状況が十分改善されていないこともあり、さらに本事業の3年間継続が決まり、2014年度まで受託した。(2014年度は茨城県に1教室として認可)

2015年1月の終講まで、合計6年間の本委託事業を行うことができたが、この「虹の架け橋教室」の委託事業を顧みると、在籍者数は総計382人で、不就学・不登校の子どもたちが日本語・教科を学び、主として日本の公立学校に、そしてブラジル人学校に送り出すことができた。同時に、この事業を通じて地域の日本語教師やブラジル人サポーターの養成、ブラジル人コミュニティと地域学校や地域社会との交流のきっかけをつくるなど、この事業の目的を十分果たすことができたと思う。

2. 「虹の架け橋教室」今後の活動と課題

虹教室の継続の必要性

在日ブラジル人の教育問題は依然解決されておらず、むしろ深刻化・複雑化している。日本へのデカセギの始まった1990年代の初期に来日した子どもたちは、日本の公立学校の受け入れ体制ができておらず、またブラジル人学校も設立されていない時代でもあったので、不就学・不登校になる子どもが多かった。十分な学校教育が受けられず、いわゆるダブルリミテッド(ポルトガル語も日本語も十分話せない)の子どもが親になる年代にあるため、一番重要な幼児教育(1-3歳)が十分になされないという「負の連鎖」が始まっている。また、保育所や幼稚園に通園する機会もないまま小学校に入学するケースが増えている。入学当初から日本の子どものとの格差が大きくこの溝が埋まらないため、不就学・不登校になる子どもも出てきている。

一方、小学校・中学校を卒業しても日本語・学習言語の習得が不十分なため、高校(大学)進学への道は狭く(で



成果発表会

きてドロップ・アウトが多い)、また就職も難しいため、中学・高校浪人が増えている。従って、入学前(プレスクール)と中学卒業後(過年齢)の子どもを対象とする日本語・学科教育の新しいシステム作りが求められている。

文部科学省もこの事態を認識し、2015年から別方式による「定住外国人の子供の就学促進事業」(虹教室)として継続を決めたが、政府助成が3分の1で、3分の2は都道府県負担となるため、県・市町村の財政が厳しい地域では、継続が難しい。ABICは、2015年度継続のため茨城県と交渉し、県レベルでの支援体制を決めてもらったが、予算措置の見通しがついていない状況にある。従って、現状はボランティア方式により細々ながら虹教室を維持している厳しい状況にある。

地域社会との支援・協力強化による職業教育(職育)の重要性

進学できない子どもはやむを得ず、アルバイトとか親と同様なデカセギ労働の仕事に就いているが、派遣会社経由の非正規雇用であり、将来の夢を描けない状況にある。従って、少しでも生業に就けるような職育が必要であり、すでに筑波大や地域ボランティアなどと協働して小規模ながら実施している。今後、さらに地域社会を巻き込んだ活動が必要になると考える。

最近、ブラジル人に代わる形で、フィリピン、ベトナム、インドネシアなどからの外国人の受け入れが続いており、ブラジル人と同様な問題が発生している。日本としては官・民一体となって受け入れ政策を考える時期に来ていると思う。

教育

大原学園での貿易実務講師活動

こうだいら のぶお
公平 伸夫 (元 三菱商事)

三菱商事の同期であった布施克彦コーディネーターの紹介により、大原学園（大原法律専門学校）水道橋本校の貿易実務講師となって足かけ4年半が経過した。商社マンの世界から教師の道に転身した経過や現在の状況などを記してみたいと思う。

商社で30年間勤務した私があらためて貿易実務に関心を持ったのは、52歳で会社を早期退職し、中小企業のフォワーダー会社に身を転じた時のことだった。それまでの使う側（荷主）から使われる側に立場が変わった時に、本来、イコール・パートナーであるべきフォワーダーの立場が極端に弱いと感じた。そして、その理由の1つが、貿易実務に対する現場サイドの勉強不足にあることを痛感したからである。

そこで、会社の若手職員の実力を向上させるため、当時スタートしたばかりであった「貿易実務検定試験」に、私も含めて挑戦することにした。併せて、貿易の最前線でありながら実態があまり公にされない、港湾、物流、環境の問題などの勉強会にも私自身積極的に参加することにより、現場の状況や課題などをつぶさに学ぶことができた。

その後、ご縁を頂いて大手印刷メーカーの物流子会社で国際物流業務の経験も積むことができ、通算11年にわたる現場業務体験を持たた。このような経緯を経て、全くの素人であった私が、ABICを通じ専門学校で講師稼業を始めることになった次第である。

私が担当している貿易実務講座は、東京都による再就職支援活動の一環で、1日3～4時間の授業単位の下、3ヵ月または6ヵ月サイクルのコースが組まれている。1クラスの生徒数は約30人、7割方が女性だ。年齢はさまざまだが、

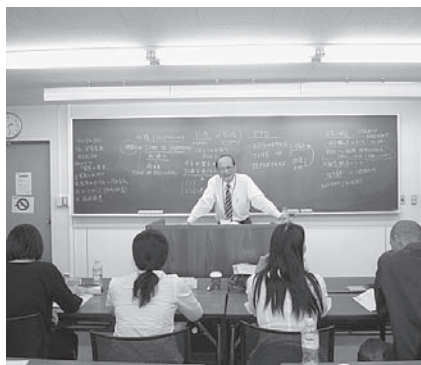
30代の方が中心になっており、貿易実務検定の資格取得に向けて、受講生も真剣に取り組んでいる。

貿易や国際物流には全く携わったことのない人たちが大半なので、まずは興味と関心を持ってもらうことが肝心だ。そのため、授業当日は、その日の朝の日経新聞の関連記事を解説することから始める。また、専門用語や貿易の仕組みを覚えてもらうことが大切なので、徹底した板書による講義や解説を行っている。

最終的には資格取得が大きな目標なので、自前の問題集や資料などのプリント類もできるだけたくさん作って配布している。さらに、受講生との距離感を短くできるように、顔と名前はしっかり覚えて上で、Q&A方式での双方向型授業を心掛けている。授業がほぼ毎日のように続く場合もあるので、翌日の授業に備えてお酒の付き合いも控えめにし、早寝早起きの健全な生活にも努めている。

教師冥利みょうりに尽きるのは、コースが終了した時に、感謝の寄せ書きやアルバムなどをプレゼントしてもらえることだ。この4年半で数百人の生徒を指導してきたが、彼らからの色紙やアルバムは私の貴重な宝物になっている。そして、資格を取得して見事に就職にこぎつけた生徒たちから、喜びのメールをもらえるのが、何よりうれしいことである。

経済のグローバル化が一層進む中で、貿易実務に対するニーズも年々高まっており、大原学園ではこれから全国的な講座展開を行う計画を持っている。そうした中、今年（2015年）、ABICから新たにお二人の方が大原学園の講師陣に加わった。お二人の先生方と相協力しながら、これからも再就職支援の活動に貢献できるように、健康で元気に頑張っていきたい所存です。



講義風景



修了記念の謝恩会にて

大原で活躍中のABIC講師陣と
左から小郷講師、筆者、植村講師

教育

日本貿易会／ABIC／関西学院大学／ 青山学院大学共催プロジェクト

高校生国際交流の集い

日本貿易会／国際社会貢献センター（ABIC）は青山学院大学と第8回（7月18日）、関西学院大学と第9回（7月23－24日）の高大連携プログラム「高校生国際交流の集い」を開催した。

この催しは2007年度からABICと関西学院大学、ならびに青山学院大学の共催で関西と関東でスタート。日本と海外の高校生の交流を大学生が企画から運営まで中心的役割を担いつつリード、大学教授、社会人が側面支援を行う産学協同の試みとし、互いに異文化理解を深めることを目的とした高大連携教育の一環として、日本と米州、欧州、アジア・大洋州諸国の高校生が寝食を共にして語り合う国際交流の場を提供している。

関西は民間国際教育交流団体のAFS日本協会大阪支部、日本国際交流振興会（JFIE）が、また、関東はAFS日本協会東京支部が協力団体として参加した。

関東（7月18日）

震災の影響によりやむなく中止となった2011年を除き、2007年より毎年実施されてきており、例年1泊2日で行ってきたが、2014年、2015年は会場の都合により1日のみの開催となった。今回はABIC CAMP 2015「Get Opportunity! Share Fun!」と銘打ち、参加者が文化、価値観、意見の相違を超え、楽しく本キャンプを経験してほしいとの思いを込めたものであった。

参加した高校生は、横浜市立横浜商業高等学校、横須賀学院高等学校、神奈川県立相模原高等学校、横浜英和女学院中学高等学校から21人、米国、イタリア、ブルガリア、チェコ、スペイン、スロバキアから来日中のAFS交換留学高校生16人の計37人。リード役はAFSボランティア大学生、青山学院大学生の計11人。日本側高校生の中には英語は苦手だが、外国の高校生との交流を希望する生徒もあり、またAFS交換留学高校生は日本語研修が来日目的ということでもあるので、交流の場では英語のみならず日本語も可としている。

例年、開会の場では特に日本側高校生に緊張の色がうかがえるが、今回も大学生スタッフの巧みなリードもあって

最初から打ち解けたムードとなり、交流の場にふさわしい雰囲気スタートした。その流れでゲームを楽しみ、お互いにリラックスしたところで、全体ワークを行い、引き続き皆で昼食を楽しんだ後、グループディスカッションを行った。

最終プログラムとして例年通り各グループによるディスカッションの発表会が行われた。発表を通しABICキャンプが目指した各人がはつらつとした活動を感じられた。

外国人留学生も日本の高校生との密度の濃い交流により、日本をより広く知ることができ、日本に対する愛着も深まったことと思われる。

最後にABICの齊藤秀久理事長（日本貿易会常務理事）および青山学院大学の増田捷紘教授のスピーチと参加者全員の記念撮影で本イベントの幕を閉じた。

今回の具体的企画から実行面でリードし、本キャンプを実りあるものに導いた大学生スタッフの事後の感想・提案も踏まえ、2016年度がさらに充実した国際交流の集いとなるよう努めていきたい。

（小中高校国際理解教育コーディネーター
川俣 二郎、高塚 謙次）



グループ・アクティビティ



閉会式に全員で

関西（7月23—24日）

回を重ねて第9回となる「高校生国際交流の集い2015」は、関西学院大学上ヶ原キャンパスを会場に「Build Your Future」（未来の自分に会いに行こう）というテーマで2日間にわたり開催された。

兵庫県立宝塚西高等学校、兵庫県立国際高等学校、大阪府立千里高等学校、私立啓明学院高等学校、関西学院高等部、関西学院千里国際高等部から高校生計29人、留学生は、米国、カナダ、チリ、パラグアイ、アイスランド、フランス、ドイツ、ノルウェー、ハンガリー、マレーシア、豪州、ニュージーランドから合計21人が参加した。今年（2015年）は、大学生の就職活動スケジュールの変更に伴い、この行事を中心になって推進する大学生の参加人員数が少し減少したが、18人の大学生が、本行事全体に細かく対応するために事前に参加高等学校を順次訪問し、打ち合わせを行う等の工夫も見られた。

行事初日は、関西学院大学研究推進社会連携機構社会連携センター長、木本教授の開会挨拶で始まり、続いてABIC会員の清原氏が「The tourism strategy of Japan & think over the true global talent」というテーマで分かりやすい英語で基調講演を行った。昼食後、体育館でのレク

リエーションを通じ、留学生と高校生はすぐに打ち解けた。続いて、5つのグループに分かれ、大学生のリードによりグループごとに決められたサブテーマにつき高校生と留学生は活発にディスカッションを開始した。夕食後は、関学の宿泊施設に移動し、交流を続けた。

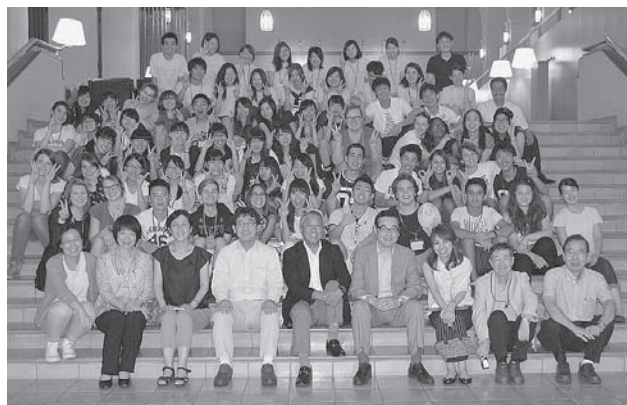
2日目もグループディスカッションを続け、まとめた結果を高校生と留学生が協力し合い、表現方法を工夫しながら、楽しくプレゼンテーションを行った。参加高校からの教諭、留学生を本行事に派遣いただいた機関からの来賓にABICも加わり審査の結果、優秀賞および準優秀賞グループを選定し、関ABIC事務局長より表彰状を授与した。次いで、木本教授より全参加高校生、留学生に修了証が授与された。齊藤ABIC理事長（日本貿易会常務理事）による閉会挨拶の後、参加者全員が名残を惜しみ、家路についた。

回を重ねるごとに、この行事に高校生として参加した生徒が関学に入學し、次に大学生として行事の推進役の一員となる循環が生まれてきており、本行事を継続してきた成果が見られる。これからも関係者の意見を取り入れながら、交流の集いが参加者にとってより意義のあるものになるように努めてゆきたい。

（関西デスクコーディネーター たちばな ひろし 橘 弘志）



清原会員による講演



参加者全員で

事務局だより

ABIC会員懇親会を開催

2015年9月9日（水）18時—19時半、ホテル日航東京（台場）地中海料理「オーシャン ダイニング」において会員懇親会を開催しました。あいにくの荒天でしたが、正会員、活動会員ならびに日本貿易会関係者など約110人の参加を得て、小林会長の開会あいさつに続き、齊藤理事長の活動報告および乾杯発声の後、活発な交流、懇親が行われ、盛会のうちに終了しました。



小林会長開会あいさつ



齊藤理事長乾杯発声

教育

「経営学特講—英語による プレゼンテーション入門」を終えて

てらだ よしずみ
寺田 好純 (元 松下電器産業)

桃山学院大学で留学生と机を並べて受講した日本人学生の英語力について懸念を感じたので、ABIC関西デスクの吉富氏にその旨話をしたのが掲題講座開講の契機であった。何がそれほど気になったのか？ 留学生全員が非英語国民で、英語学習については条件が全員同等であるにもかかわらず、日本人学生の英語力だけが格段に低かったからだ。これは実はこの大学だけの特異な傾向ではなく、複数の大学で同じ経験をしていた。今回もアンケートをとったところ、日本人学生の回答だけが的外れで、授業が理解できていないのが明白だった。

こうして吉富氏と共に同大学の正亀教授と面談の結果、掲題の講座が2015年4月8日から7月22日の期間の春学期に開講となった。

授業の組み立てに当たって、原則を2つ設定した。

①たいいてい講師は授業に当たり、授業の何倍もの準備をしている。それに対し、受講生はその授業を70%も理解していれば上々、50%でも珍しくない。講師の準備作業を2倍の200とすれば、授業で100を講義し、学生の頭に残る量を50%で計算すると、200-50で、150が無駄である。これは問題の所在が聴く側の学生にあって、いくら講師が入念に準備しても事態は改善しない。この関係を逆転させて、学生に200%の準備をさせたいと考えた。

②語学学校のマネはしない。日常会話くらいは海外にいけばすぐに習得できる。その証拠に、昨今来日の外国人の日本語力には驚かされる。必要なのは、ビジネスマンになったときに、自らの専門領域、つまり経理マンなら経理について適切な専門用語で、簡潔、明快にビジネス英語で説明ができるかどうかである。

結果、授業を次の3構成にした。

- ①プレゼンテーション技術を、英語を通して習得させる。毎週、学生にテーマを与えてプレゼンさせ、学期中に合計15回のプレゼンで鍛える。
- ②次に上記と同テーマの講義を英語とする。例えば、テーマを「エジソンは白熱電球を発明したか？」とすれば、そのテーマで講義を英語で行うと、学生はすでに1週間かけてエジソンについて調べているので、内容について予備知識ができており、理解が進みやすい。
- ③最後に、英語で日本人が理解しにくい点や、間違いやすい点などについて分かりやすく解説して、基礎英語力の向上をはかる。

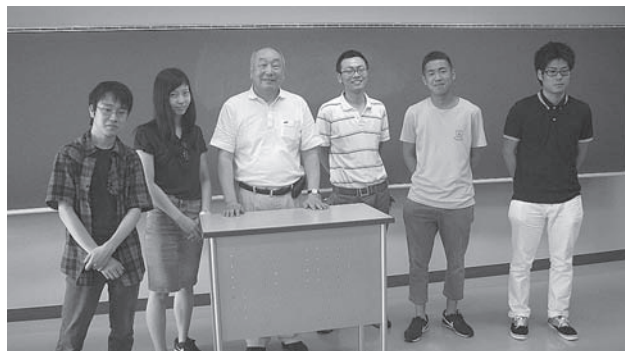
毎週のプレゼン実践は、準備も含めて、学生にかなり負担だったようだ。しかし負担は勉強した証しで、講師ではなく学生をしっかり働かせることができたようだ。「しんどい」の泣き言には「はい、ご苦労さま」で取り合わず、途中、担当教授からも「手綱を緩めないで」との激励メールも頂戴した。

こうして14回の授業は無断欠席ゼロで、最終の15回目は学生の集大成「マイ・ベスト・プレゼンテーション」の場になった。正亀教授、吉富コーディネーター、それに日本に留学中の外国人学生4人がオブザーバー参加で、予想以上に盛大(?)に行われた。

みんな堂々と胸を張って、なんとか英語で通そうと頑張りきったので、学生全員がここ一番のベストを尽くしたと実感された。授業を終えるに当たり、各自の感想を聞くと、全員が異口同音にしんどかったが、人前でしゃべる自信がついた。これからも英語の勉強を続ける。この授業を履修してよかったなど、うれしいコメントを聞かせてくれたのは何よりの報酬であった。関係者各位のご支援とご協力のたまもので、心より感謝している。



講義風景



受講生と(左から3人目が筆者)

留学生支援

「日本語パートナーズ」タイ第1期として、 現地高校で半年を過ごして

つるた たかとし
鶴田 孝俊 (元 三菱東京UFJ銀行)

長く銀行マン生活を送った後で、タイの高校の教壇に立つなどとは、考えてもみなかった。しかしわずか半年ほどではあったが、高校生たちにこれほどまでに「先生！先生！」と声を掛けられるとは思わなかったし、生徒や先生方との日々の触れ合いは、国を超えた熱いものの連続であった。

日本語パートナーズとは、2020年までに3,000人の日本人をアジア各国に送り込み、高校などでの日本語教育をサポートするとともに、日本文化に親しんでもらおうという、日本政府の方針に基づくものである。

私はABICの案内でこの派遣事業を知り、タイ第1期の29人の1人として、バンコク近郊の高校に赴任した。代わって2015年度は第2期の40人が、期間1年の予定ですでにタイの全土に派遣されている。派遣先も、フィリピン、インドネシアなど6カ国に及び、さらに対象国は増える予定にある。タイ第1期の仲間は、女性が多数を占めたが、現役の大学生からシニア世代にまで及んでいて、海外勤務経験を持つ元ビジネスマンも、私を含めて3人がいた。



昼休みに生徒たちと (左端が筆者)

私が赴任した高校では、日本語を週に8時間学ぶ語学専攻の生徒が、3学年で計100人ほどいて、彼らが主に

私の生徒であった。校内では、先生と生徒たちとの間には強い信頼関係があり、それでいてフランクでリラックスした関係であった。生徒たちも互いに兄弟のような優しさがあり、こういう教育現場はタイでは普通のことのあるが、日本から来た私には大きな驚きでもあった。

従って生徒たちは放課後には職員室の私のもとにもやって来るし、週末の小旅行には誘われるし、何より授業では親しみを持って接してもらえるから、私も裸になって生徒たちに飛び込んでいくことができた。

授業はあくまで本来のタイ人の先生たちが進めていくので、われわれ日本語パートナーズは先生とペアになってネイティブスピーカーとしての特性を出していく。これはコツをつかむと、後は臨機応変に授業が進められるようになった。

日本文化に対する生徒の関心は深く、私は無手勝流で生徒と一緒にお茶をたててみせたり、剣道や相撲を生徒相手にやってみせたり、年賀状を書いてもらったりと、悪戦苦闘したが、どれも目を輝かせて取り組んでもらえた。

文化祭では日本ブースをつくり、生徒たちが自ら企画してお好み焼きやすしのコーナー、あるいは日本の漫画を描くコーナーなどを出し、秋葉原系のカフェまで登場した。日本ブースは学内でも指折りの集客数を得たようだった。

彼らが日本にさまざまな形で親しみ、日本へ行ってみたいとの夢を膨らませていることは、本当にうれしいことだった。そうした彼らに、さらに日本への親しみをもち理解を深めてもらえたとなれば、私にとってもこの上ない半年だったといえると思う。

日本語パートナーズ事業参加者との懇談会

18期日本語教師養成講座では、日本語パートナー事業に採用されて勤務を終えられた鶴田孝俊、國近素子両氏ならびにこれから現地に赴任される阿部道弘氏をお招きし、タイ(鶴田氏)、ベトナム(國近氏)での活動や経験談および2次ベトナム派遣員(阿部氏)としての研修状況につき講演と懇談会を7月31日に行った。

各氏の幅広い現地での活躍や積極的に異文化に溶け込んでいく姿勢に感動する講演で、養成講座のメンバーからも活発な質問が出され、これからパートナーズに応募予定の養成講座受講者にとり貴重な講演と懇談会となった。10月1日現在18期修了者の中からすでに3—4人がパート

ナーズへ応募している。なお、ABIC日本語教師養成講座は2006年10月に講座を開始し現在までに169人の講座修了者を輩出し、各地で日本語教師として活躍中である。

(留学生支援グループ)



日本語教師養成講座授業風景

留学生支援

東京国際交流館での活動

2015年国際交流フェスティバル

8月15日（土）にABICの留学生支援活動の拠点の1つである東京国際交流館で国際交流フェスティバルが開催された。当日は典型的な夏日であったが、昨年（2014年）を1,000人上回る4,600人の来場者を迎えて、各国の自慢料理コーナー、福島物産品販売、E5系ミニ新幹線の試乗、「仮面ライダー」プレイランド、国際のだ自慢大会、国際派芸人マテンロウのお笑いショー上演など盛りだくさんのプログラムが続いた。

ABICは月例文化教室講師の方々のご指導による茶道、華道、書道の体験教室と着付け指導を行い、500人近くの参加者に日本の伝統美に触れる機会を提供した。またボランティアの方々には朝9時から夜8時までの長時間を会場準備、展示、指導、後片付けにご協力いただいた。

夕なぎとともに始まったのは恒例の盆踊りで、江東区民の皆さんのご指導のもと、交流館館長、留学生とその家族、ABIC会員等が夏の夜のひと時を楽しんだ。



秋の新入館者歓迎バザー

11月1日少し肌寒いが秋の陽光がまぶしい日曜日に、第28回のバザーがお台場にある東京国際交流館で行われた。

前回同様に入館者への下見会を前日午後開催し、日曜日に実験や各大学での文化祭等とかちあう在館者のための配慮がなされた。そのため新入館者は2日にわたりこれからの生活に必要な物品や冬物衣料を、ゆったりとした空間の中で選ぶことができ好評であった。

今回もABIC会員および支援企業とその社員、ならびに日本貿易会の役職員等の方々から150箱を超える貴重な品

物をご寄贈いただき、およそ15万円の売り上げを得ることができた。バザー売上金は従来同様に、同館の留学生支援活動に提供させていただき、ご支援くださった皆さまには厚く感謝申し上げます。

なお、交流館のご厚意でABICコーナーを設置していただき、日本語広場講師およびコーディネーター6人が待機し、ABICの活動状況や提供している各種講座の勧誘を行った。

（留学生支援担当コーディネーター）



兵庫国際交流会館での活動

文化教室

2015年6月から開始した留学生を対象としたABIC文化教室（空手、華道、書道）は月を追うごとに参加者が増え、10月の時点で空手は延べ参加者数24人、華道16人、書道18人、合計58人となっている。兵庫国際交流会館には、38ヵ国から約190人の留学生が寄宿し、神戸市を中心に関西の16の大学に通っている。10月に20人が新たに入館、異文化に対するの旺盛な探究心から文化教室に積極的に参加している。特に今まで漢字など書いたことのないアフリカからの学生が、書道教室で初めて筆を執り、左手で書いていたのを講師に右手で書くよう指導を受け、その後右手で書くことができるようになった。このことに対し、最初は困惑していたものの現在は喜びと満足を感じるなどの感想を寄せている。漢字の国中国からの学生は、初心者とは異なる上級の字を書くことで意義を感じている。

オリンピック種目に入る予定の空手は、男子のみならず、女子の参加者も増えている。従来は4-5人程度であったのが直近では9人が参加している。月1回の稽古では物足りないと感じる近くの空手道場に通う者も出てきている。また館外の留学生数人も参加しており、空手は今後参加者が増えるものと思われる。華道も国際化が進んでおり、参加者が増えつつある。10回受講すると講師より終了証が出るため、現在月1回の教室を2回に増やしてほしいとの要請もある。作品は部屋に持ち帰り、4-5日鑑賞している。

兵庫国際交流会館では、文化教室以外に日本語教室も2015年5月より開講、ABICはさらに広範な学生支援活動を目指しており、関西在住の会員の皆さま、お知り合いの方のご支援、ご協力をお願いしたい。



秋の新入館生歓迎バザー

10月9日（金）の新入館生ウエルカムパーティーに続き、11月3日（火）、歓迎バザーが開催された。これで3回目になるが、秋の新入生20人はじめ既入館者と一部外部からの来場者に加え約190人がバザーに参加した。今回もABIC会員および支援企業とその社員、ならびに日本貿易会の役員等の方々から70箱を超える広範囲な品物をご寄贈いただき、5万5,000円の売り上げを得ることができた。この売上金は、同館の留学生支援活動資金として提供させていただいた。ご支援くださった皆さまには厚く感謝

申し上げます。

今回、マラウイ、エチオピア、セネガル等アフリカ諸国からの留学生に加え、スペイン、ドイツ、イラン等からの日本に来て間もない学生にとり、皆さまから提供された生活必需品は、極めて安価で販売され払底するほど好評であった。関係者からは次回も是非開催してほしいとの要望があった。バザーには、関西デスクに加え、日本語講師も参加し入館者との交流も行った。

（関西デスクコーディネーター）



会員の種類

種類	内容	年会費	
正会員	センターの活動を推進する個人、法人及び団体。 (理事会の承認を得て入会)	法人及び団体	1口 50,000円
		個人	1口 10,000円
賛助会員	センターの趣旨に賛同し、会費を納める活動会員、並びに個人、法人及び団体。	法人及び団体	1口 10,000円
		個人	1口 5,000円
活動会員	センターに登録し、センターの事業に参加しようとする個人。	不要	— —

正会員

団体・法人（17社）〈社名五十音順〉

〈10口〉 (一社)日本貿易会 伊藤忠商事(株) 住友商事(株) 双日(株) 豊田通商(株) 丸紅(株) 三井物産(株) 三菱商事(株)
 〈4口〉 (株)日立ハイテクノロジーズ 〈2口〉 稲畑産業(株) 岩谷産業(株) 長瀬産業(株) 阪和興業(株)
 〈1口〉 兼松(株) 興和(株) JFE商事(株) 蝶理(株)

個人（11名）〈入会順・敬称略〉

池上 久雄 寺島 實郎 小島 順彦 宮原 賢次 吉田 靖男 岡 素之
 佐々木 幹夫 勝俣 宣夫〈3口〉 小林 栄三 槍田 松瑩〈3口〉 市村 泰男

賛助会員

法人（5社）〈社名五十音順〉

(有)イーコマース研究所 (株)エックス・エヌ 協同木材貿易(株) (一社)国際行政書士機構 NPO法人賛否両論〈3口〉

個人（405名）

下記は2015年6月以降にお申し込み頂いた方です。ご協力に深謝申し上げます。(敬称略・氏名五十音順)

〈2口〉 加藤 恒
 〈1口〉 安達 公一 石田 新一 榎 友嘉 遠藤 研二 大藏 八郎 加藤 貴美恵
 木村 行裕 倉地 弘之 来馬 公夫 神野 俊昭 小林 正己 崎尾 収
 服部 俊朗 原田 純 福田 毅 宮越 忠晴 百田 功

活動会員 2,617名

(2015年10月末現在)

賛助会員入会のお願い

ABICの活動にご賛同いただき、資金的な援助をしていただける活動会員及びその他の個人の方、
 並びに法人及び団体の皆様のご入会をお願い申し上げます。

会員入会のお問い合わせ・連絡先

特定非営利活動法人 国際社会貢献センター (ABIC)

〒105-6123 東京都港区浜松町2-4-1 世界貿易センタービル23F

TEL : 03-3435-5973 FAX : 03-3435-5970 E-mail : mail@abic.or.jp